

一般財団法人日本アジア振興財団（JAPF）

2020年春期インターンシップ論文集

期間：ベトナム・カンボジア 2020年2月16日（日）～2月27日（木）

カンボジア 2020年3月1日（日）～3月8日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国・カンボジア王国

参加人数：32名

男女内訳：男5名、女27名

国籍：日本32名

参加大学：秋田県立大学、岩手大学、宇都宮大学、大阪大学、香川大学、金沢大学、関西外国語大学、関西大学、北九州市立大学、神戸女学院大学、上智大学、西南学院大学、仙台白百合女子大学、都留文科大学、同志社大学、名古屋大学、南山大学、三重大学、早稲田大学

帰国後の活動：

・関西 修了式

日時：2020年3月27日（金）14：00～15：00

場所：在大阪カンボジア王国名誉領事館

・関東 修了式、事後研修

日時：2020年3月15日（日）15：00～19：00

場所：JICA 地球ひろば

・関西 事後研修

日時：2020年3月27日（金）16：00～19：00

場所：浪速ビル 第6会議室

・九州 修了式、事後研修

日時：2020年3月22日（日）14：00～18：00

場所：リファレンス駅東ビルJ会議室



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

【自らの目で確かめることの意義】

大阪大学 法学部 2年生

今回のスタディツアーで私が最も強く感じたことは、自らの目で実状を確かめることの重要性である。

現代の高度な情報社会において、情報の収集手段は、その大部分がインターネットを軸にしたものとなっている。その恩恵は計り知れないが、そこにはまた悪影響も存在しているのである。直接的に情報を集める必要がなくなり、間接的に大量の情報を得られるようになったことで、間接的な情報のみで実像を形作ってしまうということが起こるようになったのである。

私も例外ではなく、今回ベトナムとカンボジアに渡航する前までは、発展途上国の諸問題を解決するために肝要なことを、日本に奨学生として来日してもらうなどしてただ単に各個人の教育水準を高めることであると考えていた。また、ゴミ山も、地域コミュニティから隔離され、ゴミ山以外にはその周りに何も無いような場所だと勝手に想像していた。

しかしながら今回実際に王立プノンペン大学やバイヨン中学校、シェムリアップのゴミ山などの、諸課題に直面している現場を訪問し、自らの目で見てみて、現地の方々の話を耳で聞き、その空気を肌で感じることで、自分が考えていたカンボジア像は、自分勝手に無知な自分が、間接的に手に入れた情報による先入観だけで生み出した妄想に過ぎなかったのだと自覚した。現地の子供たちは「海外に出る」という思考をする余地はなく、その日その日を生き抜くことに必死なのである。実際のゴミ山は田畑に隣接し、生ゴミからプラスチックゴミまで実に様々な廃棄物が捨てられている、まさにその真横で実際に農作物を収穫し出荷しているのである。私はこれらの事実を知った時、驚くほどの衝撃をうけた。

これらはやはり自分で足を運んでみるのがなければ得られない感覚だろう。今回のツアーではこれらの、先入観で見ていた像と、現地で得た経験をもとに見る像との比較から得た驚きや刺激を、ほかの参加者とともに共有しあい、自分のなかで咀嚼し自分なりに言語化する機会であるグループディスカッションがほぼ毎晩あったことでより深く意義のある経験に昇華させられた。

このように実際に自分の目や耳、肌で感じることは、凝り固まっていた考え方も変えることができるのである。私は先述した通り、教育レベル向上のためには日本への奨学生としての来日が良い方法だと考えていたが、このツアーを経験したことで単なる奨学金ではなく、現地の教師育成に特化した奨学金制度により国レベルでの教育水準の向上の必要性をかんじることができた。ゴミ山のすぐ隣で農作物が収穫されている現状も、トレーサビリティを導入するなどして買い手側に選択肢を設け、農業従事者によりよい質の農作物を作る必要性を生むことで打開できるのではないだろうか。

しかしまた、この経験だけで完全な理解ができたわけでもない。私が今回のツアーで見て、聞いて、感じたカンボジア像は、全体のほんの一部に過ぎないのである。これからも、自らの



目で確かめることを大切にしながら、食欲に新たな経験を追い求めていきたい。

【『疑う』ということ—多角的に捉える—】

金沢大学 医薬保健学域 2年生

疑ってみる、言い換えれば、すべてを鵜呑みにしない。このツアーを通して気づいた、今の私に足りないものである。

事前学習から始まり、実際に研修先を訪ね、お話を聞いて、疑問に思ったことはどんどん質問して、ディスカッションで意見を共有して、また自分の中でかみ砕いて…。ツアー中、このサイクルを通して、本当にたくさんのことを学び、たくさんのことを考えることができた。普段の大学生活では、講義を受けるだけ、自分で勉強するだけ、もしくは、実験結果について友達と考察しあうくらいであるため、ツアー中の学びは、このような表現が正しいのかはわからないが、密度がとても濃かったように思う。研修先、研修先の方々、そしてこの学びのサイクルにプラスして、引率を含めた参加者のみんなのおかげで、私は『疑う』ということの重要性に気づくことができた。

私はツアー中、『疑う』ことを忘れていたということに以下の3つの場面で気づかされるが多かった。

まず挙げられるのは、研修先でのお話である。このツアー中、自分が知らず知らずのうちに思い込んでいたことに気づかされたことが幾度となくあった。貧しい、物価が安い、幸せでない…。勝手に上から目線になっていた自分がいて、本当にそうなのか、自分で確かめもせずに、そんなイメージだけを抱いていた。ディスカッションをするときも、どこかで上から考えている自分がいて、カンボジアの人々のことを、カンボジアの人々の立場から考えられていたのかと思うと、本当に恥ずかしくなる思いでいっぱいになった。しかし、今までは、誤って認識していることすら気づかなかった。少しでも、「本当にそうなのか？」と『疑う』ことができたならば…と、自分の誤認識に気づく度に思った。

続いて2つ目は、研修先から帰ってバスに乗り込んだ後の、引率による補足を聞くタイミングである。私の中にはなかった視点を与えてくれるこの補足に、私はいつもハッとさせられた。聞いたこと見たこと体験したことをそのまま鵜呑みにして、ときにはそれらに感化された状態でバスに乗り込み、補足を聞いてハッとするというパターンを私は幾度となく繰り返した。そのたびに、「ああまたやってしまった」と思うのだが、結局繰り返してしまう。逆に言えば、それくらい、『疑う』ことができるのも容易ではない能力で、簡単には身に付けられないものであると思った。でも、だからこそ、自分には必要で、少しずつでいいから身に付けていきたいと思った。

そして、参加者のみんなとのディスカッションにおいても、『疑う』ことが足りていないと気づかされた。ディスカッションに限らず、バスやちょっとした時間に話しているときもそうであったが、みんなと話していると「そういう見方もあるのか！」と思わされることの連続であった。もちろん、大学も勉強していることもばらばらであるが、知識や経験にプラスしてみん

なが持っていたものの一つは『疑う』能力であると思う。研修先に行く度に、みんなと話すと、納得したこと、すごいと思ったことだけでなく、「でもここはさ…」という意見があつてすごいと思つたし、自分にはまだまだ足りない部分だと痛感した。

『疑う』ということは、多角的に物事を捉えることの第一歩であると思う。ディスカッションの中で、多角的に考えることの重要性がよく話題に上がっていた。多角的に考えるためには、様々な角度からの情報にアクセスできること、そして、そのさまざまな情報を受け手側が適切に取捨選択することが大切であると思う。私もそうであるが、初めに入ってきた情報は正しいと思ひ込んでしまいがちである。また、違った角度からの情報は自分から求めようとしない限り、なかなか得ることは難しい。そのような状況で、ほんの少し疑うことができれば、違う視点からの情報につながるし、その結果、違う視点から物事を考えることにつながる、つまり、疑うことが多角的に考えるスタートなのではないかと思う。

ほんの少しでも疑ってみる。この力が今の私には足りないと、ツアーを通して気づくことができた。気づくことができただけでも良かったと思うが、そこで終わっていてはいけない。自分が持っていないがゆえに、『疑う』という能力が簡単に身に付けられるものではないとわかっている。だからこそ、身に付けて、多角的に物事を捉えられるようになりたい。そして、その先で、さらにパワーアップした自分で、挑戦し続けたい。

【幸せとは】

関西大学 社会学部 2年生

私は、このツアーに参加して、幸せは人が決めるものではないなと思った。このツアーに参加する前は、発展途上国であるカンボジアやベトナムは不便で貧しく、どう考えても「幸せ」という言葉は思いつかなかった。たしかに、実際訪れてみて、日本と違って衛生面や教育、ご飯は栄養ではなくお腹をいっぱいにするためのものだったり、よく停電したりと不便なことはたくさんあった。だけど、みんな笑顔が素敵だった。この国に住んでいる人は自分の国や自分の生活に対して、貧しいと思っていないように感じた。

孤児院の子供たちも不幸だとは思わなかった。孤児院ツーリズムの話は孤児院を訪れたに聞いたので、もしその順序が逆であったら見方が変わってしまったかもしれない。でもこのようなビジネスは大人がしているだけで子供が何も悪くないし、あの姿が素であったと今でも思う。このビジネスと同じように地雷館のアキラさんも小さい時に親と話されて、兵士として生きてきた。私たちの中で戦争は悲しいものでもう二度と起こしてはならないものとしているが、アキラさんは違った。戦うことが楽しいと話していた。このころの遊びも実際の武器を使っていたという。戦争がゲームだと。戦争がなくなったことによって仕事なくなった。このような考え方もあるのだなと思った。

考え方や生き方は人それぞれで、その人はその人生しか知らないわけだから、幸せだとか不幸であるとか、私たちが自分の国と比べて判断することか失礼なことだと思った。農村の人たちは今の便利な世の中を知ることなく生きていた。夜早くに寝て、朝も早起きで、衛生面や教育面は改善をするべきだと思ったが、それ以外は良いと思った。倉田さんが言っていたように、自然災害が起こったとき、戦えるのは間違いなく日本人ではなくカンボジア人であると私も思う。生きる力は日本人ではなくカンボジア人のほうがはるかに強い。なのに、強く生きている人たちを見て、不便だ、貧しいと考える私たちが一番不幸なのではないかと思った。最近の世の中は、便利になりすぎていて良くない影響を与えていることが多いと思う。だから、sui-johさんは日本に在ると言い訳ばかり探してしまう、行動力がなくなってしまふ。日本のことを言い訳ばかりの国だと言ったのではないかと思った。そこで生活して、なんとなく卒業して、なんとなく就職する。それで幸せの人たちはたくさんいると思うし、その人たちが幸せなら周りが口出しすることはないと思う。だけど私はこのツアーに参加して、それは絶対嫌だと思った。このツアーで色んな人からたくさんのものを与えてもらった。私も誰かに何かを与える存在になりたいと思った。そのために、この便利な国に慣れることなく、言い訳をしない、常にたくさんの方に挑戦し続けることができることが私の幸せであると思う。

話は戻るが発展途上国がさらに幸せだと感じるために、教育面の改善が一番重用だと思う。小さければその分洗脳されやすく、子供の時期が一番の土台となり、その後の人生へと



繋がっていく。子供たちの将来の選択肢が増えるように、子供の頭が柔らかいうちに色々なものを見たり聞いたり出来るようにどんな支援ができるか、考えたいと思った。

【いつか、自分が誰かの力になれる日まで】

関西外国語大学 外国語学部 1年生

今回、私は初めて日本から足を踏み出した。196か国あるこの世界の中のカンボジアとベトナム。なぜ、この国に行こうと思ったのか。大学生活1年目を終えた中で、何か自分に物足りなさを感じていた。毎日が同じ日々の繰り返しが退屈で、何か始めようと思っても、何をしたらいいのかわからず、勉学にも身が入らず、すべてが中途半端だった。こんな感じが4年間続き、何も得ないまま卒業するのは絶対にしなくなかった。そして、長い春休みの間に新しいことに挑戦することをまず目標とし、自分を変えていく計画を始めた。

このツアーに参加するにあたって大事にしたことは、参加者の方と沢山コミュニケーションを取ることだ。自分とは全く違う人生を歩んできて、いくつもの経験談を聞き、自分にとって刺激的な話ばかりだった。12日間では、19人全員の話聞くことはできなかったけれど、人と話すことで得られることがこんなにもあったのだろうかと改めて感じさせてくれた。

私は、このツアーのすべてのプログラムにおいて自分の成長につながるものだと感じた。その中で、2020年の現在を生きている自分に向けて、自分が今考える将来をまとめようと思う。

日本で18年間生きてきた自分にとっての、何をするにもあたり前の基準。それは、このカンボジアに来て、初めて知った。季節も、会話する言語も、着ている服も、食べるものも日本とは異なる国。人々の働き方も、性格も、挨拶の仕方も。すべてが新鮮で、まるで絵本に書かれているおとぎ話の世界に入り込んでいる感覚に陥った。ここに来る前に思っていたイメージがある。それは、貧しい国だということ。確かに、日本と比べると家も建物の設備もレベルが下だ。しかし、そこに住んでいる人たちは笑顔で苦しうに生活しているとは思えなかった。日本からみたカンボジア、そこで比べて考えてしまっていたこと自体間違っていた。今の日本には存在することが出来ない文化、人とのつながり。素晴らしいものが沢山あった。

農村の学校に行き、子供たちが元気いっぱい、歌を歌っていた。それは、パプリカという曲。そう、日本の曲だ。とても楽しそうに、体全体でダンスをしながら、きらきらした目で輝いていた。ポルポト政権の影響で、教師が虐殺され、学校があっても教える人が少ない現状。意外にも、音楽や体育を教える人が少ないことを知った。私は、大学に入る前まで、物心がついてから手放していない唯一のものが音楽だ。ピアノにリトミック、吹奏楽など様々な音楽分野に携わってきた。音楽で得たことは、私のすべてと言っても過言ではない。カンボジアの小学校に音楽教育の必要性を伝える活動をしたかった。

まだ、具体的な方針などは全くなくて、ましてや、音楽分野の大学に通っているわけでもない。そんな私が、どのようにしてこれを実現するのか。わからないけれど、やってみない



とわからないし、これが誰かのために役に立つことなのかもはっきりしないが、挑戦してみたい。

自分の人生の道を広げてくれたこの12日間を一生忘れない。また、このツアーで出会ったすべての人との関係を大切にしたい。



【フィルター越しの途上国から、対等なひとつの国へ】

同志社大学 経済学部 1年生

将来は難民キャンプにフォーカスした国際協力に携わりたいと考える自分にとって、今回の2か国研修は途上国の現状を知るための“いち経験”として参加を決意した。出発までの期間、途上国に関する様々な文献を読んで過ごしたが、そのほとんどが貧困層に対する同情の視点から綴られているものが多かった。

私は、途上国はおろか、日本から出たことすら無い身であったため、この視点が先進国によるフィルターが掛けられた視点であることに気付くことができず、“悲劇のヒロイン”として語られる貧困層の現状をただ鵜呑みにしていた。しかし実際に途上国に足を運んでみて、今まで見えていた部分は先進国の先入観で形成された世界だったことが分かった。バスの中から見る都市部はポップなお店が陳列しており、一瞥では途上国という言葉が本当に当てはまるのかと疑ってしまうほどの外観だった。

一方、都市部から少し離れると、殺風景な街並みが続き、如実にわかる格差に閉口した。日本でいう“都会”と“田舎”という差異では表せないほどの格差だった。そして彼らに必要なのは支援金でも物資でもなく、発展を継続させる知恵と技術、即ち自立支援であると改めて痛感した。以下、自立支援について深掘りしていこうと思う。

カンボジアでは、孤児を利用して利益を生み、観光客がもたらしたゴミで生活をしのぎ、支援金への依存から地雷撤去に反感を持ち…。途上国の現状には、先進国の自己実現が独り歩きしたがゆえに生み出された負の側面でのビジネスが存在する。これらは我々の支援形態にも責任がある。このような現状を知ったうえで、私が最も刺激を受けたのは、途上国発のブランドを展開している Sui-Joh や SALASUSU への訪問だった。これらのブランドは日本に向けてのオンラインショップを開設していることから、ターゲット層は先進国であることがわかる。先進国相手に取引を行うにあたり、どのようなスタンスなのかがとても気になっていた。私の予想では、どこかフェアトレードのような要素を含んでおり、その制度を推奨しているものだと思っていた。ここで個人的に「フェアトレードについてどうお考えですか？」とそれぞれ質問させて頂いたところ、どちらも予想を覆される返答が返ってきて驚いた。フェアトレード以前に、そもそも“途上国と先進国”という概念は持つておらず、生産者の収益というよりは、“消費者の消費の仕方を見直すきっかけをつくれるように”というスタンスで商品を発信している、とのことだった。

つまり、途上国が平等になる利益を！という形ではなく、消費者側となる先進国の意識を、途上国を通して再考させ、取引においてはカンボジアを下に位置付けるのではなく目線を合わせ、“途上国が”取引相手であるといった偏見掛かった認識を払拭する。学びを得ているのはむしろ私たち先進国側の方だった。有り余るほどに何でも与えられ、望めば容易に手に入ってしまう環境を、私たちは見つけ直さなければならない。彼らにとって最善な自立支援の形態は、



まず途上国として色眼鏡で見ることをやめ、ビジネス相手として対等な取引を形成すること。そこへ行きつくまでの、彼らのレベルに合わせた技術提供を行うこと。本当に現地で当事者が欲しているものは、同情だけでは汲み取れないのである。研修に参加して、価値観ががらりと変わった。

【本当の支援とは】

関西外国語大学 外国語学部 1 年生

私は、このカンボジアでのスタディーツアーに参加して、自分が思っているより支援というものは簡単じゃないことを知った。

実際にその国に行かなくてもインターネットでなんでも簡単に調べられる時代、先輩の影響でカンボジアに興味を持った私は「カンボジア」と検索した。そこで私たちが行ったような孤児院や農村の子供たちとの交流、また、小学校などでの課外授業、学校建設など様々なボランティア活動についてのサイトをたくさん目にした。私はその時、今カンボジアはこんなに支援を必要としているし、私たちがカンボジアのためにできることもこんなにあるんだな、と感じ、カンボジアに対して「貧しい国」に加えて「ボランティア」というイメージを持った。たくさんのボランティア団体があるためどれに参加しようか迷っている時、たまたま大学で JAPF のポスターを目にして、自分はカンボジアについて何も知らないことに気がつき、まずはこのツアーに参加することを決めた。

カンボジアを訪れ、様々な研修先を訪れ、私は本当に何も知らないんだと実感した。色々な国の支援もあって意外と発展していた。初等教育を受けている割合も 95% と、私の想像よりはるかに高かった。もっとも衝撃的だったのは、私の知っているカンボジアへの支援は必ずしも全てが彼らにいい影響を与えてるわけじゃなかったということ。中でも「孤児院ツーリズム」という言葉には一番驚いた。観光ビジネスでお金を得るために、本来孤児ではない子供まで孤児院に集められているという事実を知って言葉を失った。英語圏のメディアではこの問題はすでに取り上げているが、日本ではまだまだ知られていない。もっとこの事実を世界中に知らせるべきであるが、まずはカンボジアが「貧困」に依存してしまっているところから変えていかなければならないと思った。小学校での課外活動も、長期的な目で見れば現地へ先生を育成をしにいくことが彼らにとって最も必要なことである。学校建設も、そもそも学校を建てても先生が足りない。先生がいても、所得が不十分なため学校に通える生徒がいない。したがって、まずはカンボジア人の所得を増やすことから始めなければいけない、ということになる。

今回のツアーに参加したたくさんの研修先を訪れ、私は、ボランティア活動する際、自分の行動に責任を持たなければならないことに気づくことができた。自分の支援によってその状況を悪化させる可能性すらある。何が本当の支援か、答えは出ないが、まずは支援する対象をよく知り、自分が善いと思っている行動も一度批判的に考え、その状況を改善させていけるような支援をしていきたいと思った。

【私が知っていること、知らないこと、そして知らねばならないこと】

同志社大学 文学部 2年生

今回のスタディツアーを通して、私は思っていた以上に自分自身が無知で、固定された枠組みでしか物事を見ていなかったことを知った。以下、特にそう感じた三つの点について述べる。

一つ目は、日本で暮らす私にとっての常識が、ベトナムやカンボジアの人々にとっては当たり前でないということである。SuiJohの浅野さんによれば、カンボジアの人々は約束を破るし、そのことに対してなんとも思っていない。しかしこれには気候が関係している、という彼の考え方が私には興味深かった。また、カンボジアの水道水は飲めるものではないが、レストランではその水で洗った生野菜やフルーツ、その水でつくった氷の入った飲み物が出される。水道の設備が整っていないところでは、赤茶けた水やミョウバンで鉄分を取り除いた水を飲むと聞いた。カンボジアの人々は我々ほど水のきれいさに拘らない。飲み水ではない水を飲むことで病気になることもあるというが、そもそもさほど重くない病気ならば気にせず、病院には行かないということが衝撃的だった。私の日常生活は非常に恵まれたものであると実感すると同時に、経験、特に日常生活によって思考が固定されてしまうことがあることに気付いた。

二つ目は、立場によって伝えたい内容やその伝え方が異なることである。例えば、ベトナム戦争について、戦争証跡博物館ではベトナム戦争の悲惨さを展示によって学び、クチトンネルではベトコンがアメリカに立ち向かい勝利したという事実を体験した。また、カンボジアの観光について、観光省、つまりカンボジアが見せたいカンボジアと我々が知らねばならないカンボジアとの間にズレがあると感じた。観光省はアンコール遺跡群などへの観光に力を入れているという話を聴いたが、トゥール・スレン強制収容所やキリングフィールドなどへの言及は無かった。前者には様々な言語に対応できるガイドさんたちがいたが、後者を案内していたのは音声ガイドだったことから、このズレがわかる。事実は立場によって見方が変わるが、受け取る側によっても伝わる「事実」が異なってくるのではないかと思った。

三つ目は、我々が知ろうとしなければ手に入らない知識や情報があることである。先述のように、観光省はトゥール・スレン強制収容所やキリングフィールドを訪れることを積極的には勧めていない。私は、このツアーでなければこのような場所へ行くこともなく、このような場所があることも知らなかつたろう。ブラックツーリズムという言葉も知らぬままだつたろう。孤児院ツーリズムについても、同じことが言える。一緒にダンスをしたり、鬼ごっこをしたり、髪の毛を編んでもらったりと、私は孤児院の子ども達と楽しい時間を過ごした。その後、引率のスタッフから孤児院の子どもの中には親がいる子や農村から無理矢理連れてきた子がいることや子ども達を金稼ぎの手段として扱っているケースがあることを教わり、ボランティアや寄付の在り方を考え直すきっかけになった。

最後に、今回のスタディツアーで私は自分の立場から物事を考えていることに気づき、様々な立場によって物事の見方が異なること、ある立場の人にとって不都合な情報が広まらないこ



とを知った。そのような情報が広まらないのは、見るべきものを見ようとせず、知るべきことを知ろうとしないことがある我々の姿勢と無関係では無いだろう。情報が氾濫する現代、私が知っている情報はそれだけで正しいと言えるものだろうか、一つの立場からしか見えていないものではなかろうか、別の見方が可能なのではないかと吟味する姿勢が求められていると思う。

【スタディーツアーを終えて】

早稲田大学 文化構想学部 2年生

私は、今後両国をはじめとした後進国への支援に携わる見通しを持たず、ベトナム・カンボジアへの興味のみを理由にツアーに参加した。ツアーを終えた現在、自分が「支援」という形で他と関係を築くことは難しいという気持ちは出発前よりも強くなっていると感じている。

本ツアー内で様々な研修先を訪れ、ベトナム・カンボジアが今日抱えるさまざまな問題、あるいは問題を解決し、両国をより発展させるための取り組みに触れた。その中で、現在起こっているあらゆる事象は他分野と相互に関わりながら成立していること、ひとつ問題を解決するためにはそれに関連する他分野の事象と良好な関係を保ちつつ、解決するための取り組み自身が自給自足的にその実践を可能にするシステムを内包する必要があることを感じた。それを最も強く感じた研修先がプノンペン経済特区である。多くの外資系企業が進出することでカンボジアの経済発展や周辺の雇用創出に大きく影響し、進出企業は優遇措置を受けることができるという win-win の関係性を築くことが可能となっている。また、電気代の高さや浄水設備の不十分さといった企業が進出する際に障壁となるカンボジア特有の問題に対しても、経済特区内で利益の出る形で取り組んでおり、経済特区内の活性化につながるだけでなくこれらの問題が解決されることでより経済特区に進出を希望する企業数が増加するという効果も生んでいる。

このような解決策の先例について知ったことは、与える/与えられるの関係を前提とした「支援」が諸問題を解決するためのアプローチとして適切なものであるかについて自分の中で改めて考える契機となった。支援者/被支援者が与える/与えられるの関係から脱却することは極めて困難であり、その関係性が孕む問題は実際にカンボジアで先進諸国による一方的な支援に依存する例からも明らかである。しかし、その関係性から離れて両者が互いに好影響を与えあう関係性となり、「支援」として行っていたはずの取り組みが後進国の社会システムに取り込まれたとき、それは果たして純然たる「支援」と呼ぶことができるかどうかは疑問であると感じている。

この「支援」を問うこと以外にも、このツアーをきっかけにさまざまな分野の問題に関する自身の価値観や既知の事実を問い直し、そしてそれは帰国後の現在も続いている。資料やツアー中のノートなどを見返し、研修中に知った事項について調べるうちに、この12日間の経験のみを根拠として思考することの危険性についても考えが至った。ベトナム、カンボジア、そして私が住む日本を含む世界の状況は日々変化しており、今回のツアーで得た知識やそこで得た価値観も刻々と過去のものとなる。このツアーの期間内でベトナム・カンボジアへの見識を深め、自分自身を問い直したことが今後の糧となることは明らかであるが、それ以上にツアー内で知ったことや感じたことを今後改めて自分の中で整理し、アップデートし続けることこそが今後の自分に必要であると感じた。この経験を真に価値あるものにするためにも、12日間で得たものにこれからも向き合い続けていきたい。

【ボランティアとは】

仙台白百合女子大学 人間学部 1年生

このスタディーツアーに参加し、ボランティアについてとても考えさせられた。私は、このツアーで、自分がどの分野のボランティアに進むか決めようと考えていた。しかしその答えは出なかった。むしろ、ボランティア自体行うべきなのか、考えることとなった。

孤児院を訪れたときのことである。人生で始めて訪れた孤児院は、とても清潔で子供たちは明るく、すぐに異国から来た私たちを受け入れてくれた。短い時間で言語も通じないにもかかわらず、こんなに仲良くなれたとことに私は自信すら抱いていた。私が力になれることが見つかった気がした。しかし、帰りのバスで引率から聞いた現状に言葉を失った。孤児院では、私たちのように短い時間遊び、別れを繰り返すことで、親との別れを重ね精神を病んでしまう子供がいること。孤児院ツーリズムという寄付などを集めるために子供が連れ去られたり、劣悪な環境で生活を強いられている子供たちがいること。それは、全て私たちのようなスタディーツアーの参加者やボランティアが需要や原因を作り出している事実には大きなショックを受けた。本当に私たちの助けが必要なのか？今まで考えていたことやってきたことが全て自己満足だったのではないか？そこで、現地の中学校での話を思い出した。「この学校では、日本からインターンを募集しているが受け入れるのは簡単なことではない。教師不足のこの国で、インターンのためにクメール語と英語を話せる教師をつけなければならない。ほかにも多くの費用がかかる。」私たちは、募集を見て、必要とされていることを前提に応募する。半分は間違っていないし、そういう面があるのも事実だと思う。しかし、もう半分の隠されている面を知った上で国際協力をしている人はどれだけいるのだろうか。私は答えを出すことが出来なかった。

また、HOPE 医療センターと現地の中学校でのことである。私は学校で栄養学を専攻している。そんな自分の特性を生かしたボランティアが出来たらと考えていた。そこで、医療センターで「ここに管理栄養士はいますか？」と質問をした。うまく通じなかった可能性も考えられるが、管理栄養士という言葉すら知らないようだった。無理もない。病院には、まず病院食がない。そして、後で知ったが栄養士は、カンボジアに一人しかいないようだ。しかし、この病院の最大の来院理由は糖尿病が多い。にもかかわらず、管理栄養士がいない。この現状が不思議だった。その理由は、中学校で知ることになった。訪れた中学校では、給食があった。そして給食は貧困家庭が多いため、腹を満たすということが一番大事だということであった。栄養学とは、十分な食事が補償された上での学問だったのかもしれないと、気づかされた。

正直このツアーでは、自分の知識不足と無力さを大いに痛感させられた。何が支援なのかも分からなくなってしまった。しかし、考えるということが大切なかもしれない。支援したい相手のことを考える。これができているようで、出来ていなかったのだと感じた。やりたいという気持ちだけで進まない。相手がいることを忘れないで、誰のために自分が活動したいのか考えて今後の活動をしていきたいと思えた。

【本当の豊かさとは】

上智大学 短期大学英語科 1年生

私はこのツアーに参加するにあたって、本当の豊かさとは何なのかについて考えた。

まず自分がツアー参加前に考えていた豊かさが、金銭面でしっかりとした収入基盤があり、それをもとにして、精神的豊かさが出てくるという経済面を重視した考え方だった。しかしツアーに参加したことでこの考えが変わり、自分の偏見で豊かさを考えてしまっていたことが分かった。ここで考絵が変わったきっかけが3つある。

1つ目にまず自分は豊かさが幸福と同じようなものと考えていて、こういった視点からカンボジアやベトナムの街中を見ると楽しそうに暮らす人が多いような気がした。そういう街中を見て、必ずしも経済面に余裕がなくても精神的豊かさはあるのかなと思った。

2つ目はディスカッションや、Sui-Johでのお話でカンボジアの人たちはその日その日を生きていて、1日を生きれば次の日が来ると考えているということを知ったことである。これを聞いて、日本は数年後のことなど、遠くのことを考えていることが多いと思った。でも、こういった数年後のことを考えられるのは、次の日も確実に生きているという確証があるからであって、そういう確証があるからこそ、次の日のことやその日をあまり重視せず、先のことを見るほうが多いんだなと思った。自分は最初この数年後を見る生活の方が、精神的には豊かな生活を送れているのではないかと考えたが、視点を変えて考えると、ある意味ではカンボジアの人のそういった生き方も理想的なのではないかと思った。また、自分の生活を考えても、たまに1日を粗末にして過ごすこともあったため、こういった幹部自阿野人の暮らし方を見ると、自分の生活や生き方がとても恥ずかしく思えた。

3つ目は、農村の中学校で聞いた、いじめに関してである。カンボジアの学校では、宗教の関係もあって、いじめはほとんどないと聞いた。これを聞いた時、私は、カンボジアの人は経済的豊かさがなくても、日本よりもずっと心の豊かさを持っているのではないかと思った。日本の教育現場ではいじめが多くみられるし、私はこれが起こる原因として、いじめている本人も受ける人も自分の経済的豊かさやそれによって精神的に恵まれていることに自覚がないためにいじめが起きてしまっているのではないかと考えた。対して、カンボジアの学生たちは、自分たちの状況をよく理解していて、そういった点から、心の豊かさがあるなと思った。

この3つの点からわかったのは、精神的豊かさと経済的豊かさはどちらが先に満たされているかというのは全く関係なく、本人がどう思うかによって豊かなのかそうではないのかが決まってくるということと、他人の豊かさを自分のものさしで決めつけてはいけないということである。しかし自分のなかでの豊かさははっきり定義することができなかった。今後は自分の豊かさや、ほかの人が求めている豊かさが何なのかを考えていきたい。

【ツアーを通して体感したこと】

宇都宮大学 教育学部 2年生

私がツアーに参加した理由は大きく2つ挙げられる。いつもの生活を繰り返していたら分からないこと、景色、色々な人の考え方を自分のものとして吸収するため。もともと興味があった発展途上国や貧困国が1番必要としている支援とは何なのか、それに対して自分ができる支援は何なのかを知り、実行できるようにするため。上記の2つである。そして実際にツアーに参加し、あらゆる文化や人々に実際に触れて、ベトナムやカンボジアのイメージ180度変わり、自分の考えや行動についても変えることが出来るきっかけとなった。

カンボジアと言われて自分の中で貧困、衛生状況がわるいというイメージがあった。カンボジアと比べると日本の方が豊かであり、衛生状況が良いと思っていた。研修を通していく中で、そもそも貧困とは何なのか、豊かさとは何なのか考えさせられた。現地の日本語科の大学生や孤児院の子供たちから中学生の勉強に対する高い意識、様々なものに対する知的好奇心、キラキラとした瞳、笑顔がものすごく感じられた。これは豊かでないといえるのか。こういったものは日本と比べて豊かなのではないか。少なくとも今までの自分の人生と比べたら豊かであるといえる。豊かさの捉え方はディスカッションのテーマでも取り上げられ、人によって捉え方がちがった。豊かさは様々なことによって決められる数値ではなく、人々の考え方や心によって決まるものなのではないかと感じた。

私はツアーの中で特にも孤児院を訪れることをとても楽しみにしていた。発展途上国の子や貧しい国での子供の支援に興味があったからである。実際孤児院に行ってみると、建物が綺麗であったり、子供たちがよい服やアクセサリを身につけていたり自分の想像ちがう世界が広がっていた。また、孤児院でボランティアをすることは良いことであると思っていなかったが、その善意が子どもの搾取につながっているかもしれない、孤児院ビジネスがあるという現状を知り言葉に出ない感情が生まれた。ボランティア言えど、責任を持った行動が大切だと痛感した。これはこのことだけでなく、生きていく上で共通することだと思った。子供たちと接する上で簡単な英語とかクメール語とかはもちろん必要で、言語習得の大切さを物凄く痛感させられたが、それ以上に世界の共通言語は笑顔なのだと思い知らされる場面が多々あった。

このツアーで1番印象に残っている言葉は「本質的な失敗は行動しないこと」である。何かやりたいと思ったことはひとまずやってみること。すると行動している人と繋がれ、ポジティブな会話が生まれ、失敗したとしてもそれは経験になりネタになる。失敗はメリットしかない。自分は今まで人の流れにうまくのり、やりたいと思ったとしてもやってこないことが多かった。しかし、このツアーに参加したことがまず自分の行動したことの一步なのではないかと思う。ベトナム、カンボジアで20人で過ごした12日間は私が今まで過ごしてきた人生の中で最も密度の濃い日々であった。参加したことだけで満足せず、もっと行動し、様々な世界を見て、自分ができることをしていきたい。また、行動をする上で、イメージや想像だけで物事を決めつ



けることだけはないようにしたい。

【オークン！「支援」ではなく「学び合い」を】

早稲田大学 文化構想学部 1年生

「オークン！」カンボジア滞在中に一番多く耳にし、口にしたクメール語だ。私たちの生活スタイルを基準として、その価値観を他の国の人々にも押し付けていたことに気づかせてくれたカンボジア、オークン。JAPFのHPに「本当の支援ってなんだろう」というキャッチコピーがある。現在多くの学生がカンボジアの学校で教育支援をしている。研修で訪れた中学校にも、日本からのインターン生が来ていた。本論では、持続性がある活動とは、相互の学び合いであると仮定し、教育現場において相互の学び合いがもたらすものを検討する。

私たちが自国を「先進国」と称して自国の基準に満たない国を「発展途上国」と呼び支援しようという考え方は傲慢である。いわゆる一方的な支援のことだ。日本とカンボジア、優劣をつけることはできず、対等な関係であるはずだ。だからこそ、お互いが良いところを学び合って、それぞれの課題を解決していく関係性が大切だと思う。その学び合いにおいて両者にメリットがある以上、持続性のある活動となる。ベクトルは違えども、それぞれが目指すゴールに近づいていけることが理想である。

日本がカンボジアで行う活動はカンボジアにとってどのようなメリットがあるか。日本からの人材は一時的に教師不足を解消することができる。また、ポルポト政権によって芸術分野を教えることができる先生も多く虐殺されてしまったため、他国からの教師を必要としている。一方で、表面的には豊かに見える日本にカンボジアは内面的な豊かさを教えてくれる。研修先の中学校を創設したチアさんによると、カンボジアの学校にはいじめはないそう。お互いの違いを認め合い、心の余裕があるからこそ他人を貶めようとはしないのだろう。日本では学校だけでなく職場でのいじめも少なくない。カンボジアの子どもにはごく普通に身につけている違いを認め合う寛容さ、精神的余裕を日本人も学ぶべきであると思う。カンボジアの学校教育では、ポルポト政権に関する歴史は教えていないそう。教科書に書かれていることは全てが事実で、客観性に基づいていると信じていた私にはショックであった。これは政府が情報を操作、選別することは容易であるということの意味する。日本の教科書はどうか。知識人が大事だと思う内容を教科書に載せている。教科書の内容が全てと思いつまむのではなく、批判的思考を持つことが大切であると改めて感じた。また、教育分野にとどまらず、情報化社会の中で情報とどう向き合っていくか考えさせられた。

JAPFのツアーを通して客観的にカンボジアを捉えることができた、と思い込んでいた。しかし、JAPFのツアーで見たカンボジアもカンボジアの一側面にすぎない。私たちが食事をしたレストラン、宿泊したホテル、訪れた場所はどれも「観光客向け」であり、真のカンボジアではなかったと思う。これをカンボジアの全てと捉えるべきではないと感じた。それと同時に、もっとローカルの人と話してみたい、一緒に生活してみたいと思った。このツアーはきっかけにすぎない。残りの大学生活、日本の近くにある国、ベトナムやカンボジアとどのよ



うに関わっていくか、楽しみである。最後に、濃い学びを提供してくれたカンボジア・ベトナム、ツアー運営の方々、一緒に語り合った仲間たち、オークン。

【JAPF2 か国ツアーで見えたこと】

秋田県立大学 生物環境科学部 2年生

私は、「ベトナム・カンボジアの現在の状況を見ること」と「その状況からどのような国際協力が可能なのか」をツアー中の目的としていた。その結果、ツアーでは、その現状を具体的に知ることができ、ほかの大学生や現地の方と話し合うことができた。今回は、それらの内容について報告しようと思う。

まず、ベトナム・カンボジアの現状についてである。ベトナムのホーチミンの都市部は、かなり栄えているように見えた。また、カンボジアのプノンペン都市部は、ベトナムには劣るが、栄えているように見えた。具体的な差は、建物や人口、経済だと思った。建物は、ベトナムのほうがきらびやかであったし、人口は何倍も多いため、生産力があり、経済が良く回っていると思った。また、ベトナム・カンボジアの歴史が経済に関係しているだろう。ベトナムは、ベトナム戦争が1960年から1975年まで続いたが、カンボジアは、内戦が1970年から1991年までであった。戦争の期間や終結の時期、戦争内容が二つの国の成長に差が生じた原因となったと考えた。

一方、都市部との農村部の格差も大きいように思えた。今回訪問したカンボジアのシェムリアップの農村部では、インフラが整っていない部分があった。特に、経済が都市部のように回っているようには見えず、自給自足に近いような生活が見て取れた。今後、農村部は、インフラ整備や技術の流入により、収入の向上や日常生活の変化が起こることが予想される。私は、このまま発展してもよいのだろうか疑問に思う。なぜなら、それは、都市部で起きている問題や先進国で起きている農村部からの流出が生じると考えたからだ。特に、農村部からの流出による第一次産業の従事者が少なくなることは、輸入に頼る可能性や生産国であるメリットを減少させる要因となるため、避けるべきではないかと思う。

次に、どのような国際協力が可能なのかについては、どのような支援が必要なのかについて先に述べる。支援内容としては、インフラ整備を行い、経済発展による環境、収入の格差是正である。インフラ整備には、ガス、電気、道路、上下水道が存在する。特に、私は、ごみの問題と農村部の格差是正について考えていきたいと思っている。ごみの問題は、先進国に比べ、多くが道端に散乱していることや、カンボジアのごみ山の解決である。しかし、農村部の発展は、先に述べた問題が生じるだろう。そのため、それらを防ぐ策が必要だろう。策として、第一次産業への支援、農村部での雇用創出などが考えられる。また、ごみ問題については、国民の意識改革や法律の改定が必要だろう。ごみの最終廃棄については、ごみ山ではなく、先進国の焼却処理技術を支援されることで解決できると考えた。この問題には、ごみ山で生活を成り立たせている人々の処遇とごみの分別だ。これらは、政府が介入することで可能になるだろう。

では、この現状から、私には、どのような支援が可能なのかについて考えた。だが、いま



だに結論は出せずにいるため、今後は、どのような将来を目指すかについて再検討しようと思う。

以上で、報告を終える。

【ツアーに参加して得たもの】

都留文科大学 文学部 1年生

私はこのツアーに参加して自分が今までどれほど発展途上国について無知だったかを思い知らされた。自分がこのツアーに参加しようと思ったのは単純にどこでもいいから海外に行ってみたいと思っていたところ偶然以前このツアーに参加していた友人にこのツアーをすすめられたことがきっかけだった。それまでは発展途上国については学校で習った程度の知識しかなく、これといった興味もほとんどなかった。それでもあえてこのツアーに参加したのは漠然と発展途上国に行けば何か自分がしたいことが見つかるかもしれないと思ったからだ。

結果として私は教科書では得ることができない貴重な経験や知識を得ることができた。ベトナム戦争やポル・ポト時代に起きたことをより深く知ることができたのはもちろん、今生きている人の戦争に対する感情を知ることができたのは自分にとってとても新鮮だった。自分の中では戦争で起こったことはそれを繰り返さないようにするためにも後世に伝えなければいけないというのが一般常識だという考えがあった。しかしポル・ポト時代に国民の虐殺に加わった加害者と家族を殺された被害者が現在同じ村に住んでいることや、やっと平和になった今を壊さないためにもポル・ポトのことは後世に伝えたくないという人が多いことを知って自分の考えが常識ではないことを知ることができた。また枯葉剤の被害を受けたベト氏や少年兵として地雷を埋めた過去を持つアキ・ラーさんと実際に会って、教科書ではすでに解決しているように見えるベトナム戦争やポル・ポト時代の被害がまだ生きているのだと感じた。

そして私はこのツアーを通して必ずしも発展途上国が発展国の支援を必要としているわけではないのではないかという疑問を抱いた。Sui-joh や kurata ペッパー、sara susu でお話をきかせていただいたときに、どのお店も品質が高いものをそれに見合った値段で売るという理念を持っていて、初めにそれを聞いたときは発展途上国のカンボジアでは売れないのでは？と思ったが、あえてそのような売り方をするのが「可哀相だから買ってあげる」のではなく「ほしいから買う」というように商品のブランドを上げ、その結果、従業員の収入の安定につながるということを知った。アンコールワットなどの観光地でたくさんの幼い子供が物乞いや商品を売っているのを見て、子供が働かざるを得ないカンボジアが、経済的にまだ発展しておらず、発展国からの支援が必要な状態なのは確かだが発展国が人件費の安い発展途上国に縫製工場などを建設し安価に大量の製品を生産している事実を見ると、発展途上国の経済の発展を妨げているのは実は発展国ではないかと思った。

この12日間のツアーを通してわずかだが自分が将来何をしたいのかが見えてきたように思う。加えて自分が持っていた発展途上国に対する先入観がなくなり、現在のベトナム、カンボジアのポジティブな面、ネガティブな面の両方を大学生のうちに知れたことはこれから社会を生きていくうえでとても意義があると思った。

【ツアーを通して学んだこと】

南山大学 人文学部 2年生

私は、このスタディーツアーを通して、物事を多角的な視点から見ることの重要性を学んだ。特に多角的な視点が必要だと思った、3点をまとめた。

まず1つ目は、歴史認識についてである。今回のツアー内で、特にポルポト政権に関して、様々な立場からの意見を聞くことが出来たが、それらはそれぞれに異なっていて、どの意見も納得出来るものだった。もし、私が強制収容所や処刑場しか訪れていなかったら、ポルポトのことを殺人鬼としか見る事が出来なかったと思う。確かに、ポルポト政権下の3年間で200~300万人もの人々が亡くなったことは事実だが、ポルポトの政策が、国内の格差を是正するためのものだったということを知った時、彼のことを少し人間味を帯びてみる事が出来るようになった。このような大量虐殺などの負の歴史については、とりわけ被害者側に焦点が当てられ偏った見方になりがちだが、加害者側の動機や、背景には、新たな知見をもたらす事実が隠れている可能性もあるため、双方向からの意見が同等に必要だと感じた。

2つ目は、支援についてだ。支援には、被支援国内と国外からの視点の両方が必要だと感じた。農村の学校で、海外からの短期間のボランティアは、特に幼い子どもたちに、出会いと別れを繰り返すことによる精神的ダメージを与えかねないことや、ただでさえ教員不足であるのに、外国人のボランティアには通訳を付けなければ活動が成り立たないため、余計にコストがかかる場合があることをお聞きした。このお話から、支援が必ずしもプラスに働かないこともあるということを知った。その背景には、被支援国が必要とする支援と実際の支援との間に生じているズレがあるからではないかと考える。そのズレを解消するためには、まず、被支援国が、自国に必要な支援を把握し、それらを国内外へ発信することで、支援の見える化を図ることが必要だと感じた。そうすることで、支援する側も、自身の知識や技術を被支援国のニーズに合った形で提供することが出来るのではないかと考えた。

3つ目は、世界についてだ。私はこれまで世界を日本基準のものさしで見ていたことに気づいた。このツアーに参加するまでは、そのものさしを使って、カンボジアは発展途上国で日本は先進国というように無意識に優劣をつけていた。日本では、水道や電気などのライフラインはもちろん、徒歩圏内で日常生活に必要なものから不要なものまでなんでも揃ってしまうほど物が溢れ、何もかもがあって当たり前の生活に人々は慣れすぎている。それらが、災害などで無くなってしまった時、私たちは本当に弱い。そうなった時、私たちは、カンボジアの人々の生きる知恵を学ぶ時が来るのかもしれない。どの国にもそれぞれ弱みと強みがあって、それらを互いに補い合い、高め合っていくことが出来るのだから、優劣をつけることは出来ない。「みんな違ってみんな良い」そんな言葉を思い出したツアーだった。

【「戦争」の歴史教育についての考察】

名古屋大学 文学部 2年生

今回のツアーを通して、今まで自分が持っていた価値観を数多くひっくり返されたが、中でも考えさせられたのは大学でも専攻している歴史に対する価値観である。本論文では、訪問先やディスカッションで感じたことを述べ、特に「戦争」の歴史教育について改めて考察していくこととする。

最初の訪問先のベトナムでは、戦争証跡博物館やクチトンネル、統一会堂といった戦争の歴史を後世に伝える施設があり、いずれもお金をかけたしっかりとした運営がなされている印象を受けた。ただし訪問客のほとんどが外国人であった点は考えなければならないだろう。グエン・ドク氏の「当時のアメリカ兵を憎いと思うことはあるが、今のアメリカなどについてはそう思わない」という言葉からは、彼の複雑な経験と深い教養を感じた。一方、カンボジアの戦争は様々な思惑が絡み合った複雑な「内戦」であったということもあり、戦争に対する空気が日本やベトナムとはかなり異なっていた。戦争を伝える重要史跡であるはずのトゥールスレン収容所やキリングフィールドには私たちを含め一部の観光客しかおらず、生き残った人々はそこでお金を稼ぐことで生き延びているという現実があった。バイヨン中学校におけるJSTの代表チア・ノル氏のお話では、ポル・ポト時代については教えておらず、信じていない子供も多いこと、また内戦の影響で日本に亡命したチア・ノル氏自身も内戦について教えるのは怖いと感じていることなどを伺った。地雷博物館のアキ・ラー氏も「戦争について口にするのは怖くてできない」と仰っていた。カンボジアでは内戦について語ることはタブー視されていたのである。「ポル・ポトの歴史を後世に伝えるべきか」というテーマのディスカッションでは、「後世に伝えるべきだが、当事者世代の感情を考慮して慎重になるべきだ」という意見や「若い世代に伝えることで、国全体の風潮も変わっていくのではないか」という意見などがみられた。

ツアーを経て意識するようになったことがある。それは「『歴史』は平和な国だからこそできる学問だ」という考えである。カンボジアでは今、つい20年ほど前まで敵として争っていた人々が共に暮らし、戦争からの復興と国の発展が日々進んでいる。争いのことはいったん忘れ、力を合わせてきたからこそ今のカンボジアがある。歴史教育についてはそのあとの話なのではないだろうか。カンボジアではポル・ポト時代の影響で教師の数が足りていないなど、そもそもの教育システムが整っていない。歴史教育をどうしていくのかという問題は、その先にある。では、将来「戦争」の歴史教育を行うことを見据えた上で今できることは何なのだろうか。私はまず「戦争の遺産である資料を確実に保存していくこと」が大切なのではないかと考えた。トゥールスレンやキリングフィールドの保存はもちろん、当時の人々の話を文章化やデータ化するなどしていくことも必要だろう。今私たちにできることは、カンボジアが十分な復興を遂げられるよう必要な支援をしていくことだ。いつか子供たちがきちんと戦争の歴史を学ぶこと



ができるようになることを願っている。

【私の考えた、これからの「支援」】

北九州市立大学 文学部 1年生

私は、今回のスタディツアーではいろいろな支援の形を見てきた。それは資金や物資の援助だったり、ボランティアだったりしたが、私が印象に残ったのは Sui-Joh の浅野さんや KURATA ペッパーの倉田さんの支援だ。彼らは支援したとは思ってないのかもしれないが、私は彼らのしたことは立派な支援だと考える。日本で「支援」と聞くと、資金や物資を届け、ボランティアを派遣することだけのようと思われることが多い。実際に私もそう思っていた。しかし、今回の旅で「支援」することについて考え直してみると、「支援」とは支援先の人々の暮らしを安定したものにすることが目的だという根本的なことに気付いた。これが目的なら、「支援」で支援先の人々の生活を少しでも発展させることが絶対に必要だ。例えば倉田さんは、胡椒農家の人と手を組んで胡椒畑を復活させていた。これは、倉田さんが農家の人々の希望を聞いて、彼らがやりたいことをできるように「支援」したからだ。胡椒農家の人々は、もしも、ある日突然倉田さんがいなくなったとしても、胡椒を育てて生活していけると思う。資金だけの援助や人だけの援助を支援だと呼んでしまうと、それらが急に無くなった時に支援を受けていた人々はきっと暮らしていけなくなってしまうだろう。私は、このような支援は本当の支援とは呼べないと思う。もちろん、そのような支援が必要とされる場所もある。しかし、そのような場所でも、支援が無くなっても、人々が前より少しでもまともな暮らしができるような「支援」は必要だと思うのだ。例えば、ボランティアの教師は子供やその親に知識を与えるだけでなく、他人への教え方も学ばせるのだ。そうすれば、いつかボランティアがいなくなってもボランティアに教わったことをその組織内で共有し、回していけるだろう。

また、今回のツアーで知って本当に驚いたのは「貧困に依存して生活している人もいる」ということだ。「貧しい」ことで支援をもらってお金を集める人がいる、だから「貧しい」というイメージが無くなっては困る。ベトナムもカンボジアもそんな人々の影響を少なからず受けている。そのため、内側に入ってみるまで「貧しい」国でないことが分からなかった。私が研修で見てきた人は「貧しい」ことは過去の事として、未来と今を良くしようと頑張っている人がほとんどだった。そんな彼らへの「支援」は「たくさんのお金を、とりあえずボランティアを」ではなく、彼らが思うように発展していけるように「必要な資金を、彼らの知りたいことを過不足なく教えてあげられるボランティアを」のほうが良いと思う。そうすれば、教師の足りない新築の学校などもなくなるはずだし、「貧しい」イメージに騙される支援もなくなるはずだ。

今回のスタディツアーでは、今まで考えたこともないようなことをたくさん考えさせられた。特に「支援」については気付かされたことも多かった。私は、これからの「支援」が、本当に求められているものを援助し、自身らだけで発展していけるようにするような、「未来につながる手助け」であって欲しいと考える。

【必要な支援の形とは】

北九州市立大学 文学部 1年生

今回このスタディーツアーに参加して、豊かさとは何か強く考えさせられた。ツアー中、物質的にはそれほど豊かとは言えずともそれなりに楽し気に暮らしている人々を度々目撃し、それはその生活以外を知らないという、情報の乏しさによって成り立つ幸福ではあるかもしれないが、たくさんの情報を仕入れることができ、物質的にも豊かでありながら現状に不満を抱くことの多い先進国の人々の姿とは対照的に思えた。またこの目撃から、物質的に豊かではない発展途上国の人々は幸福ではない、その状況を改善するために我々先進国の人間はもっと物質的な支援をしなければならない、といった先入観や驕りが自分の中にあったことに気づかされた。

現在、カンボジアは貧困率や進学率を始めとする様々な数値が改善傾向にあり、かなりの発展も遂げている。にも関わらず現地訪問以前の私のように未だ発展には程遠く、不幸な国であるという思い込みを抱く人も少なくない。それには先進国の人々の自己実現欲を満たす対象としてのカンボジアの姿を求める、貧困国という面に依存する人々がカンボジア国内に一定数存在しているためだという話を聞いて、(もちろん物質的な支援もある程度は必要であるが)今カンボジアに必要なのはそういった人々を増幅させてしまうであろう物質的な支援よりも技術の伝播といった目には見えない形の支援ではないかと思った。

では今カンボジアに必要な技術とは何か。それは「教育」と「衛生」の二点だと私は考える。様々な施設を巡る中でほとんどの人が口にしていたのが、現在のカンボジアの教師の少なさと待遇の悪さや国が学校に対して支給する教育の補助金がかかなり少額であること、音楽や美術、体育といった子供の感性を育むための科目を教えられる人がいないといった「教育」に関する問題点であった。教育の技術の伝播によって教師になるならないは別としても教師になるために必要な要素を満たした人や、子どもの感性を育むための科目を教えられる人を多く生み出すことができるのは確かであるし、そういった人々の増加によって教師の待遇の悪さや国からの補助金の少なさといった問題点の改善も期待できるのではないかと思った。

次に「衛生」である。現在、子どもの予防接種率なども向上しており、衛生面に関して大きく改善しているように見えるカンボジアだが、病院を訪問した際に待合室が外にあったり、手術室にエアコンが効いていないように見えたりしたことや、孤児院では歯磨きをしたことのない子どもがほとんどであったことから、細かい部分での衛生意識や技術が不十分であると感じた。衛生に関する技術の伝播は様々な病気、それに伴う問題を予防・改善してくれると思う。

今回のツアーを通して問題を知る、考えるに当たって自分の目で見て耳で聞いて肌で感じるということがどれほど大切かということを感じた。また、カンボジアに限らず世界の様々な問題の多くは色々な事柄が複雑に絡み合っており簡単に答えが出せるものではなく、完璧な答えは存在しないものだとすることを常に忘れないようにしたいと思った。

【カンボジアの「これまで」と「これから」—教育とともにある未来—】

大阪大学 文学部 1年生

私は今回のスタディーツアーで、物事を多面的に、そして他角度から捉えることが、カンボジアの「これまで」と「これから」を考察し、理解するにあたって、有意義だと学んだ。

カンボジアの「これまで」とは何か。まず初めに、ポル・ポト政権や内戦といった負の歴史。そして地雷やゴミ山などの目に見える問題。さらに医療や教育における貧困格差など外からは目につきにくい問題。今回あらゆる研修先で実感したのは、全ての問題がポル・ポト政権や内戦の影響を少なからず受けているということだ。知識人の喪失により、カンボジアの医療・教育レベルはいまだ不平等であり、ASEAN 諸国と比べ生活水準は低いと言える。またディスカッションでも上がったように、経済、環境への影響も著しい。一つの問題として完結しているように思われたものは互いに結びついて複雑に絡み合い、カンボジアの「これまで」を形作っている。想像していたよりはるかに解決は難しいと感じた。

ではカンボジアの「これから」とは何か。私が思うに、それは、Sui-Joh のような現地の良さを残しつつ地域活性化を図る人、企業。それは、教育を受け、自分で未来を切り拓く力を持った子どもたち。それは、ゴミ山や農村の改善と他国の支援。そしてそれは、カンボジアの歴史や実情を知り、そこから得た学びを次につなげる私たちの行動力。今回のスタディーツアーでは、自分の中で、今まで知らなかったカンボジアの課題が浮き彫りになったのと同時に、素晴らしい伝統や遺跡、人々の心の豊かさといった、たくさんの魅力も発見することが出来た。そのような魅力が失われることなく、負の連鎖が断ち切られることが一番の理想だと実感した。

特に、私はカンボジアの問題の解決に今一番大切なことは、教育分野だと考える。これは個人的に興味のある分野で以前から漠然と思っていたことだが、今回子どもたちや学生と触れ合ったり、バイヨン中学・高等学校で現状をうかがったりしたことで、その思いは確信に変わった。次世代を担う子どもたちの教育は、長い目で見れば必ず各分野の問題解決に繋がってくると思う。教師・医師不足だけでなく、ゴミ山や農村の現状にも、おおもとは教育水準、教育格差問題が横たわっているのだ。その解決のため、カンボジア政府や企業、団体は学校建設事業や教師の育成・優遇を推進している。では私たちにできることは一体何だろうか。今回のツアー中に探し求めて、至った答えの一つは、無理のない限りの支援を続け、周りの人と他国について話してみることをやめない、という単純なものでしかなかった。だがその行動が、カンボジアの「これから」に多少なりとも貢献するのではないかと考えている。

今まで私は、アフリカや難民の子どもたちの支援にばかり目が行っていたが、カンボジアという日本に近い国で似た状況に陥っている子どもたちを目の当たりにし、遠くばかりを見て近くに気づいていなかった自分に気がついた。SDGs が掲げる「誰一人取り残さない」世界の実現が、どれほど難しく、だが達成されるべきなのかを、カンボジアの7日間で感じる事が出来た。これからの大学生活、そしてその先で、この7日間での経験や得た考えを忘れずに



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

いたい。

【日本とカンボジアを比較して分かったもの】

香川大学 経済学部 2年生

私は今回のカンボジアスタディツアーが人生初の海外経験だった。

今ではかけがえのない友人達だが、初対面の人達と海外に行くという事や、その上コロナウイルスの影響で社会全体が混乱している中の渡航だったので、ツアーの前から大変緊張していた。

そして、現地に降り立った瞬間からは普段自分が過ごしている日本との違いに驚きの連続だった。原付やトゥクトゥクなどの交通量の多さ、鳴り響くクラクションの数々、免許を所持せずに運転している人も多くいるとの事だった。何故これで事故が起きないのか不思議だったが、このような環境下でも慣れてしまえば容易に運転できるようになるものなのだろうか。

カンボジアはある意味、経済の発展具合や人々の活気など数十年前の日本を見ているようで、スタディツアー中、現在の日本とカンボジアを見比べることで何か今の日本では失われたものに気づく事ができるのではないかと考えていた。

しかしながら、バスの窓から街並みを見ているとおかしな事に気づいた。カンボジアの街並みの中にそぐわない様な高層ビルや真新しいショッピングモールなどが至る所に建てられていたり、現在もたくさんのビル群が建設途中だったのだ。また街にはクメール語だけではなく、ハングルや中国語が多く溢れていた。この事からもカンボジアが中国や朝鮮と密接な関係を続けてきた事が分かる。

観光省では、アンコールワット以外にもたくさん観光名所があるとのお話を伺った。実際にもカンボジアでは至る所で開発が行われている。この開発の資本となっているのが主に

中国で、外資が大きく介入する事で、ある意味では昔ながらのカンボジアが中国によって失われつつあるとも言える。個人的には日本の京都の様な観光第一の都市となると、今回のコロナウイルスのような事が起きれば観光客が激減する事で瞬く間に財政が崩壊してしまう。観光産業は財政の大きな基盤足りえるが、他の産業が十分に発達していないと国の基盤が脆くなってしまう。カンボジアはまだその域に達していないといえるのではないだろうか。

農村の方ではつい最近電気が整ったような場所も多く、観光客の集める事より各種インフラの充足が急がれる。

カンボジアで過ごした8日間は本当に密度の濃いものとなった。今回のスタディツアーが私の人生の大きな転換点となるように、これから日本で生活する際にも海外との共通点や差異などを日頃から考えていきたいと思う。現在の日本で失われてしまったものについても継続して考えていきたい。そうする事で日本だけでなくカンボジアをより良くする事に繋がると考えているからだ。

【カンボジアの今と未来と幸せ】

神戸女学院大学 文学部 1年生

私はずっと、インターネットやテレビで見るだけでは本当のことはわからないと思っている。そんな私が特に興味があったのがカンボジアで、世界遺産アンコールワットはとても有名で観光客がたくさん来るが、東南アジアの貧困国というイメージがあった。加えて、高校生の時に世界史で、カンボジアにはポルポト政権という大量虐殺を行った残酷な過去があったことも知った。多様な側面をもつカンボジアの今が知りたくて、このツアーに参加した。

いわゆる“イメージ通り”だった研修先はゴミ山や貧困学校だ。いかにも日本人のカンボジアのイメージだと思う。しかしそこにも行ってみなければ分からない意外性がある。例えば縫製工場で働くよりゴミ山でゴミを拾って売るのが儲かったり、貧困学校の子どもたちが、私たちがいる・いないに関わらず笑顔に溢れていたりすることは、貧困＝悲しいというテンプレートを打ち破った。

つぎに、衝撃を受けた研修先はAEONモールや王立プノンペン大学だ。カンボジアのイオンとはどんなものかと思って訪れてみたら、日本と全く変わらない、いや私の家の近くのイオンより発達しているのではないかと、というくらいのクオリティであった。客層は観光客と富裕層らしきクメール人で、店員も富裕層でかつ読み書きができるクメール人だった。私が何を買おうか迷っていると日本語で話しかけてくださった店員さんもいた。王立プノンペン大学では日本語学科のクラスにお邪魔したが、上回生はペラペラに日本語を操っており、下級生と私たちとの通訳までしてくれた。私の語学能力より絶対に世界に通用する。先進国に生まれて教育を受けたとか関係ない。きっとこういう人たちが将来出世するのだろうと痛感し、私ももっと頑張ろうと心に決めた研修先であった。

八日間で、カンボジアの様々な面を訪れて回った。それと同時に、どうすればカンボジアで生きる人々がもっと幸せになれるかを考えるようになった。医療の充実？経済成長？細かい部分に目を付けるとまだ山ほど改善点はあるけれど、それらを実現するためにはすべて教育が関わってくるのではないかと考えた。質のいい医師をおくのだって農村部まで発展させるのだって、それを必要だと感じ実行するカンボジアの現地人の意識が必要だ。外国からの支援だけではいつまでも“貧困に依存するカンボジア”になりかねない。初等教育は95%の人が受けられているらしい。こう聞けば聞こえはいいが、そこから続く9年の義務教育と3年の自由教育のなかで、家の仕事を手伝うことを優先したりお金の問題で退学する人が多く、職業につながる寸前の状況が気になった。言葉ばかりで実現することは難しいと思うけれど、まずは政府が教育に重きを置くようにシフトチェンジするべきではないか。みんなが9年間は教育を受けられるように、そうすれば国民の意識が変わってより住みやすいカンボジアになるはずだ。



と少しずつ、現在既に変わっている最中だと思う。50年後くらいにまたカンボジアを訪れて、色眼鏡をかけずに自分の目で見てみたい。

【僕の思い込み】

関西外国語大学 外国語学部 1年生

僕は、今回このカンボジアスタディーツアーに参加して、人間にとっての考え方、つまり思考の違いについて深く考えるようになった。まず一つの例として挙げるのは偏見についてである。一般的にカンボジアは貧しく発展していない国として認識されているだろう。

結論を言ってしまうえば、僕も同じような認識を持って、カンボジアを見ていたし、それは紛れもない事実であると今回のスタディーツアーで感じた。しかし、僕は一週間のカンボジア研修を通して貧しい国の定義を大きく変えさせられた。プノンペン空港を出れば、日本と同じように車が通り、ビルが建っており、飲食店もある。実際にのちに sui-joh の浅野さんに聞いた話でその驚きが納得に変わったが、日本の富裕層と遜色ない人も多くいるということを知った。

果たして、カンボジアについて深く知らない人がこのことを学校で学ぶカンボジアの知識からくみ取ることができるのだろうか、いや、できない。しっかりと都市というものが存在し、日本と見間違えるほどの景色があるという事実を得ることができた。

次に、多くの人のカンボジアのイメージと合致するであろう地域について述べる。貧困小学校、地雷博物館、ポルポト政権の影響、心の傷が未だに癒えていない人、農村で暮らすたくさんの子供たち、ごみを拾って生計を立てる人。ここで述べたものは私も事実として知っていたカンボジアの現状だった。しかし、教科書で見る貧困層の人々の写真はどれも笑顔を写していない。あえて映していないのだろう。しかし、実際はどこよりも笑顔にあふれており、とても大きなエネルギーを感じた。この事実には偏見という言葉を用いるのが正しいかはわからないが、大きな衝撃、そして感動をもらったのは自分にとっても良い体験となったし、実際に自らの目を見て、心で感じ、より多くの人に思い込みを壊してもらいたい。

ここまで述べたように、僕たちは、貧困国に対して、優越感を得て、別の世界を妄想しそれがいつしか自分の中での事実として刻まれる。インターネットを使えばいつでもどれだけでも他人の考えを事実として、吸収することができる。少し、カンボジアについての話題と離れたレポートになっているようにも感じるが、実際に自分で感じることの大切さをこのツアーを通して一番大きく感じた。まだまだ僕の知らない、知っていると思い込んでいる大きな偏見が世界にはたくさん転がっている気がする。この大学生という素晴らしい環境を利用して、少しでも多くの思い込みを壊していこうと思う。

【ツアーを終えて考えること】

同志社大学 心理学部 1年生

私は今回のツアーに参加し、ごく一部ではあろうがカンボジアの過去と現在について知り、未来について考えることができた。中間時点のディスカッションで「カンボジアの子供たちが生活する上でどのような整備がされるべきか」について、私はやる気のある子供たちに対してのみ教育支援をしていくべきだと考えていた。これはカンボジアの人にとっての幸せが何なのかは私たち日本人が決めつけるべきものではなく、日本の水準に近づけるような教育が一概に正しいとは言えないと考えて、学びたいと考える子供だけにその環境を整えるのがいいと思っていた意見だった。しかし、農村でのお話から働くために学校に来なくなる生徒もたくさんいるということが現実には起きている問題なのだと実感し、教育を受けることの大切さも楽しみもわからないまま大人になっていくのではないかと思えた。さらに、農村の子供たちと遊ばせてもらい、この子たちに将来の選択肢を狭めてほしくないと思った。教育に関する問題に直面するかもしれない子供たちを実際に見て触れ合ったことで、どこか観念的で他人事だった自分の考え方が変わったのだと思う。ツアーを終えた今でもカンボジアの人々、とくに子供たちにとって何が必要で私たちにできることがあるのかははっきりとはわからない。また、金銭面での支援について、カンボジアの人が貧困に依存していることが問題視されていた。私にとってこの視点はツアーで初めて得たもので、これを聞いた時は長い目でみると他国の支援ありきで発展していくのは確かにだめかもしれないと納得した。しかし、ごみ処理施設を作るのにもお金がないとか、学校を開いても給料等お金の問題があるといった現実を知ると、支援への依存も仕方ないことに思えた。金銭面の支援への依存を問題として支援を減らしていけば、社会的弱者にしわ寄せがいくだけだと思われた。結局、世間一般によしとされている金銭的支援やボランティア活動は今のカンボジアには必要なもので、今よりさらに教育面での支援が発展していくべきだなと現時点で私は思う。

もう一つこのツアーでの収穫として、自分自身これから何がしたいのかを考えられた。Sui-johの浅野さんが考える前に行動したほうがいい、最初は何もできなくても大丈夫だということを話されていた。いつも何かやる前に言い訳して逃げてしまう私にとってこの言葉は響いた。進路に関係なくたって考えられるリスクがあったって、思いついたやりたいことはやっしまえばいいのだと思った。今やりたいことは、カンボジア以外の国にも行ってみたいことだ。今回カンボジアに行って、文化・生活・歴史などあらゆる面で異なり、支援も必要だということが感じられた。別の国ではまた別の方向で視野が広がるだろう。今まで海外に興味などなかったが、カンボジアでのツアーを経験し、自分の考えを深め視野を広げるためにも様々な国へ飛び出していきたい気持ちが生まれた。

【自分の視野の狭さ】

同志社大学 心理学部 1年生

私が今回のツアーを通して一番に感じたのは、自分の考え方の視野がどれほど狭いものかということだった。このように感じた事柄は大きく分けて3つある。

1つ目は、カンボジアに対するイメージについてだ。私は今回のツアーに参加するまでカンボジアの人々は貧しくて不幸せな生活を送っていると考えていた。しかし、プノンペン空港を出て街中を見てみると、高いビルがずらりと立っていたり、有名企業の会社があつたり、日本よりも圧倒的に交通量が多かつたりと、とても発達していて、想像していた貧困のイメージとのギャップに驚いた。また、貧困学校や農村で出会った子供たちや、町中にいた現地の人々を見ると、たとえ貧しくてもみんな笑顔がすてきで、とても楽しそうに生活しているように見えた。このことから、私は物事を判断するには、実際に体験することが重要だということを実感した。また、幸せな生活を送るには、自分たちが置かれている環境だけでなく、自分がその生活に対してどう考えるか、ということも大切なかもしれない…と思った。

2つ目は、ポル・ポトについてだ。私は今まで、ポル・ポトは無実の人々を大量に虐殺した悪人だと思っていたが、様々な研修先を訪れていくうちに、ポル・ポトには、彼なりに、カンボジアを良い国にしたいという気持ちがあつたことがわかり、国を思う気持ちにおいてはポル・ポトにも、完全な悪とは言い切れない側面があつたのだな…と少し驚いた。このように、複数の視点から物事を考えることで、新たな発見があつたり、その物事についてより深く理解できたりするということを実感することができた。

3つ目は、自分の将来についてだ。私は自分の将来について、多くの人がそのような道に進むから、とか、このような選択をすれば社会的にも評価されるという視点で考えることがほとんどだったが、Sui-Johの浅野さんのお話を聞いて、人生は一度きりで限られたものであり、それゆえに自分がやりたいと思うことをやらないと非常にもったいないな…と考えるようになった。また、日本を飛び出してあまりなじみのない異国の地で企業した浅野さんの話は、これからも日本国内で暮らしていくのだろうと考えていた私に自分が持っている可能性の大きさを教えてくれ、もっと大きな視点で自分の将来を考えてみようと思うきっかけになった。

今回のツアーで私は、自分の価値観は世界には通用しないということを何度か実感させられた。上に挙げたことはもちろん、ポル・ポト時代の真実は現在でも口に出してはいけないことだったり、人間の健康にも自然環境にも悪影響を及ぼすゴミ山が存在し、そのゴミ山で暮らしたり生計を立てている人々がいること、発達する都心とは対照的な農村の教育状況やライフラインの状態など、自分が当たり前だと考えていたことが何回も覆され、その度にその物事について考えさせられた。しかし、このように自分の知らなかった世界を自分の目で



見ることは、自分の視野を広げることにつながり、今回のツアーを通して、その面白さに気づくこともできた。これからも海外に出て、自分の知らない世界をたくさん見て、自分の視野を広げ、自分の価値観の形成につなげていきたいと思う。

【カンボジアは途上国ではない】

大阪大学 外国語学部 2年生

今回は私にとって2度目のカンボジアだった。前回は個人的に観光で訪れただけだったため、観光以外のカンボジアを知り、自分がカンボジアや日本に対して出来る何かを見つけたいと思いこのスタディツアーに参加した。

前回の旅行の時点で、カンボジア＝貧困というイメージは完全に、と言っても過言ではない程に無くなっていった。確かに都市部と農村部の間に格差があることを目で見て感じていたけれど、それでも私たち日本人がハッと気づかされるような豊かさがあることに心を動かされた。そして今回のスタディツアーで、カンボジアは途上国ではないとはっきりと認識するようになった。事実として存在する格差や問題に負けなくらい大きなパワーを現地の人々、特に子どもたちや同世代の若者から感じたからだ。

王立プノンペン大学で日本語を学んでいる学生と交流した際に、仲良くなったある学生は「将来は日本で働きたい」と言ってくれた。彼の嬉しそうな、でも少し照れたような表情から、デンマーク語専攻の私がデンマークで働きたいというのとはどこか違った輝かしさや情熱、憧れや希望を感じた。そのような様々な思いの滲み出る夢を語ることが容易ではないと近頃痛感していた私にとって彼は眩しかったし羨ましかった。しかしそう思うと同時に、彼だけではなくあの場所にいた多くの学生に憧れの存在として映る日本とはなになのか、日本に住む日本人として複雑な思いも抱かざるを得なかった。

農村でのチア・ノルさんのお話からは、教育がいかに重要であるのかを教えていただいた。彼がどのような思いからどのようなシステムを構築して学校を運営しているのか、また、農村ならではの困難を歴史や詳細なデータを交えてお話して下さって、日本では知り得なかった貴重な情報を得ることができた。また、彼の構築したシステムで、熱心な校長先生のもと、学校に通える子供が都市部ではなく“農村に”いるというのは、未来を担う存在を考えたときに大きな意味を持っているように思う。しかし一方で、この学校はチア・ノルさんがたまたま土地とお金を持っていたために建てることができたことも事実だ。そもそもカンボジアの政府が教育に多くの予算を配分していないという事を考えると全土に教育が行き渡るには長い道のりが待っている。夜のディスカッションやその発表の中で、農村の状況を改善するためには教育が必要だという意見が多かった。実際に私も、カンボジアに限らず貧困の問題を解決するには教育が一番だと考えていた。しかし、「貧困に依存している」という Sui-Joh の浅野さんの言葉のように外国からの支援に頼って学校を建設したり、教員を育成したりすることが良いことなのか考えたとき、うなずくことができなかった。持続可能な制度を作っていくためには、やはり国内で運営していけるシステムが必要で、そのためには財源確保のための経済発展、イノベーション、観光業などなど多くの事柄に直面すると思われる。

このような状況の中で、私に出来ることは何なのか。その答えの一つとして、パワーを持つ



ていると感じた子どもたちや同世代の若者と“対等なパートナーとして”助け合い、支え合える関係を築いていく、という答えを見つけた。途上国というイメージを払拭できたからこそ得られた考えであり、具体的なことはこれから考えていけばいいと思う。私の価値観を大きく変えてくれたカンボジアに、そして価値観を大きく変える可能性を秘めた多くの日本人たちに何らかのインパクトを与えたい。

【貧困国が抱える環境問題】

同志社大学 経済学部 1年生

学校で教えられることのうち、実社会に役立つものは限られている。大学受験を終えて、大学に入学して約一年、ここまで生活を送って抱いた感想が冒頭の一節である。アルバイトをはじめたり、部活に入ったり、様々な式典のお手伝いをしたり、ボランティア活動に参加してみた1年のうち、これらのうち一体どれに経済学が活きているというのだろうか。経済学を専攻したのは環境経済学に興味があったからだ。カンボジアならば様々な環境問題に直面しているはずである。貧困国ともよべるかの国で、どういう支援がされているのか、その問題点は何なのか、実社会でどういう支援が行えれば、どういう経済の仕組みを構築すれば、経済学的な価値を世の中に還元できるのだろうか。経済学的観点から見識を広めたい。それがこのツアーに参加した動機である。ツアーを通して、環境問題関連で以下2点が気になった。

① 水質の問題

東南アジアの水道水は基本的に飲むのに適していないことが多い。カンボジアも例外ではなく、現地の方々も水は飲料水を購入しているらしい。ポルポト政権崩壊後に水道インフラを整備したのは日本であり、アジアの中では衛生的な方だという。飲料水と生活に必要な水とが分けられているので、ここは大して問題にはならないだろう。しかしながら、ゴミ山視察で廃棄物から生成された水を農作物に使用している事実を見過ごすことはできない。

生物濃縮によって最終的には人間に害をもたらしてしまう。加えて、トレンサップ湖などで水上生活を送っている人々も生活排水を湖に流れる水に頼っているが、近年の人口増加、経済成長を受け、ゴミの漂流、工場からの化学薬品の混ざった排水など急速な水質悪化に悩まされている。

② リサイクル構築の不完全性

カンボジアでは観光省を筆頭に、観光客に対して積極的なアピールを行っている。その誘致活動が実を結んでか、近年では観光客が年々増加しており、それと比例してゴミの排出量も増加しているのだ。実際ゴミ山に足を運んだことと、日常のゴミ箱を見て発見したのだが、カンボジアではゴミの分別処理が行われていない。さらに言えば、ゴミ処理施設すら存在していない。よって、日々排出される廃棄物はゴミ山に延々と放棄されるだけであり、これではいくら土地があっても足りないくらいである。ただし、ゴミ処理施設の建設には焼却炉を3炉備えようとする、約288億円と莫大な費用を要することとなり、約8440億円の国家予算(2020年現在)で運営するカンボジア政府としては中々の痛手を被る為、設備建設が思うように捗らない。更に、ゴミ排出量削減を目指して、缶・ビン・可燃ごみを分別したとするならば、それに付随する人件費、分別車両などの諸経費が上乗せされ、さらに現状は厳しくなる。



今回のツアーで露見したこうした事実を受け止め、今後のゼミ活動や3年間の履修を通して、具体的な解決策を模索できるよう勉強により一層励んでいこうと考えている。

【本当の支援とは】

岩手大学 農学部 2 年生

今回のツアーを通して、先進国に住む私達ができる本当の支援とは何かについて、改めて考えさせられた。私達は本当の支援というものをきちんと理解していなかったと感じた。

sui-jo の浅野さんがそう思う理由についてお話しされていた。浅野さんはお話の冒頭部分で私達にカンボジアのイメージを聞いてきた。私は、なんとなく「貧困」と答えた。他のメンバーも「スラム街」や「アンコールワット」など表面的で有名な部分をざっくり答えていた。しかし、カンボジアの現状は私達が思っている以上に発展していた。首都プノンペンでは、高級車を何台も所有できるほどの大金持ちが住んでいる現状もあるという。しかし、発展してきている部分よりも貧困の部分の方が大きく取り上げられるのにはきちんとした理由があった。それは、貧困への依存である。カンボジアは貧困で支援が沢山必要だというイメージを他国に植え付けないと上層の人間が今の裕福な生活が継続できない現状があるという。このように、私達が貧困層の人達に支援（募金など）しているつもりでも実際にはその支援がきちんと必要な人々に届いていないことがある。この事実非常に驚かされた。きちんとカンボジア国内の現状を把握した上で何を誰にどれくらい届けばいいのかを考えなくてはならないと思った。ただ、募金して満足してはだめなのだと分かった。恐らくこのような現状はカンボジア以外の発展途上国でも起きている可能性があると思った。

また、ツアー中とても印象的だったのが子供達の笑顔だ。アキラさんの孤児院やシェムリアップの農村で子供達と触れあった。現地の子供達は、毎日お風呂にも入っていないさそうだったし、歯磨きの仕方もよく分かっていなかった。ほとんどの子供達が裸足でいつ怪我をしてもおかしくない常態だった。私達から見るとあり得ない光景であるが彼らにとっては日常で、特に気にすることなく思いっきり遊んでいた。子供達の笑顔を見て、逆に私達が元気をもらったし、自分たちが生活している環境がどれだけ恵まれているかを改めて考えさせられた。カンボジア国内では、初等教育を受けることができる子供達は近年で 77% とかなり増加した。しかし中等教育、高等教育を受けることができる子供達の割合は一気に減少している。農村のチアノルさんもお話されていたが、学校建設など教育に関わる日本の支援はあまりないのが現状だという。カンボジアの生活水準向上のための支援も必要だが、カンボジアの将来性を見るとより高い養育を受けれる環境を作ってあげることが重要だと思う。将来的にさらに子供達の笑顔が増えるような支援が必要だと思った。

そして最後に、今回のツアーを通して出会った 14 人には感謝しかない。今回できた友達は一生の宝物だ。岩手から一人で参加したにもかかわらず、みんな優しく受け入れてくれてとてもうれしかった。またこのメンバーでどこか行きたい。濃密な 8 日間をありがとう。

【カンボジアに行って考えたこと】

三重大学 生物資源学部 1年生

カンボジアに来る前は、メディアが言うような“貧しい発展途上国”というイメージがあったが、実際は違って、先進国より貧しいことには変わりないけれども、バイクで通勤・通学したり、楽しそうに話をしていたり、私達と変わらない生活をしていて、むしろ、日本よりも活気に溢れていたように感じた。

カンボジアに来て、カンボジアで生きている日本人の話を聞き、歴史や文化に触れることで、多くの“気づき”を得ることができた。

ここでは、歴史と教育についての考えを書く。カンボジアは、約100年、フランス領となった後、ノロドム・シハヌーク政権、親米派のロン・ノル政権、ポル・ポト政権に治められてきた。トゥールスレン収容所、キリング・フィールドではポル・ポトについて学んだ。ポル・ポト政権は、カンボジアの首都人々がプノンペンと農村部の貧富の差の拡大に不満を持っていた最中に誕生し、「原始共産主義」の下、“平等”な世を目指して政策を行った。事前学習では、ポル・ポトの残虐さに驚き、ポル・ポトに心酔している、当時の幹部のヌオン・チアのインタビューを見て鳥肌がたった。加えて、資料や展示を見ていると、処刑の方法が描かれた絵や、収容所で痩せ細った人の写真、収容所の人々の扱いの様子、があり、怒りと悲しみが胸がいっぱいになった。けれども、引率の方や他の参加者と話しをしていると、自分が「ポル・ポト＝絶対、悪」という、一点からしか、ポル・ポト時代を見ていないことに気づかされた。ポル・ポトは、貧富の差をなくしたいと考えていたし、幹部もその考えに賛同して行動した。実際、引率の方曰く、農村の住民は、都市部から住民がきたことで農作業が楽になったという事実もあり、一方的に「ポル・ポト＝絶対、悪」とはできない。しかし、殺人は倫理的には「悪」であるために、出来事が起こった背景は考えなければ、歴史は繰り返す。したがって、歴史を繰り返さないために、カンボジアを含めた外国の歴史を学び、背景を考えて、客観的な見方を身につけて、自国の歴史も客観視するのが良いと考える。これは、教育にも通ずることで、「なぜ、学ぶのか？」という理由にもなると考えている。なぜなら、知っていなければ、「現地を訪れよう」とはならないからである。実例を出すと、私の祖母は、原爆で被害を受けた広島県出身であり、そのことが一つの要因となって、戦争に関心を持つことになった。対して、王立プノンペン大学の学生はトゥールスレン収容所に行ったことがなかった。また、地雷博物館のアキ・ラー氏は、「学校では、政府が国の二分化を考慮してポル・ポトのことを教えられていない」とおっしゃっていた。もしかしたら、日本でも戦後すぐは似たような状況で、今でも真実が語られないままになっている可能性もある。今のカンボジアで、ポル・ポト時代の影響が残っているように、過去の出来事は現在に影響する。したがって、どの国でも、たとえ残酷な歴史であっても、知識や事実を、隠すことなく伝えていくべきだと、私は考える。そして、学んだ側は、知識を“知っている”だけではなく、それらをパズルのようにつなげて「知っている」と言え



るまで、自分の中で消化して、落とし込まなければならないと感じた。この新たな視点で、これからも学んでいきたいと思う。

【私が見たカンボジア】

北九州市立大学 文学部 2年生

私はこの研修にカンボジアに行ってみたくらいという単純な動機で参加したが多様なカンボジアの姿を見ることで様々な角度から物事を見るということを身につけ、多くのことを得ることができた。

カンボジアというと貧困、不幸という印象を持っていたが都市部と農村部では景色が全く異なっていた。プノンペンやシェリムアップなどの観光客も多い街ではインフラは整っていないものの交通量は多くビルや電子広告も見ることができ、想像よりも発展していた。一方で農村部はイメージ通り、ライフラインでさえ未だ整備されておらず決して豊かな生活とは言えない。しかしそこで暮らす人々は不思議と不幸には見えなかった。彼らにとっては当たり前の生活であり、格差というものを実感した。

また様々な方からのお話を聞いてカンボジア政府は解決すべき課題を認識しているにも関わらず都市や観光業の発展に力を注いでおり、本当に支援を必要とする人々や貧困などの影の部分を見て見ぬふりをしているように感じた。カンボジア政府が目指すカンボジアをつくるためにはまず貧困層の生活水準を向上させるような支援が必要であると考えた。貧富の差を解消するために教育が注目されることも多々あるが日本のように行き届いた教育制度をつくるためにはそれ以前に解決しなければならない課題が多くある。例えば農村では経済的な理由だけでなく、村で取れる果実などを食べれば生活には困らないという考え方が一般的であるために教育の必要性を伝えることが難しい。このような現状にはポルポト時代の知識人の虐殺も大きく影響している。社会を成立させるために必要な人材を失ったカンボジアにとって教育が最優先であると私は考えていたがこれは偏った見方であったと気づいた。この現状を変えるために村の学校の校長は自ら学生の家庭を訪問し直接保護者に教育について話しをすることがあるという。子どもの頃に強制的であったといえど多くの地雷を埋めたアキラさんは現在、地雷を撤去する活動を積極的に行なっている。現状を少しでも改善しようと行動することで国際協力や支援に繋がっていることも事実であるがこれが利用されてビジネスの一環となっている一面もあり、ボランティアや国際協力のあり方についても考えさせられた。ポルポト政権時代の歴史や貧困であることが観光資源になってしまっていることを残念に思った。

カンボジアにおける課題は様々なものが絡み合っていて一つ解決したからといってカンボジアの現状が向上するわけではない。多様な視点から現状を見つめ直し社会が潤滑になるような手段を考えるべきである。そして日本では就職に関する問題が頻繁に取り上げられるがそれは私たちに多様な選択肢が与えられているからであり、選択肢のない過酷な環境で仕事をしているカンボジアの人々を見て私たちは恵まれている改めて思った。今後の生活においても固執した見方ではなく多面的な広い視野を持つことを意識していきたい。



【カンボジアのいまをみて】

北九州市立大学 文学部 1年生

今回このスタディツアーに参加しようと思ったのは自分の知っている世界以外のことを知り私が今知っていることを見つめなおしたいという理由からだ。実際にこのスタディツアーに参加したことで自分の生活している日本という国の当たり前や風景などの再発見をすることができた。またカンボジアという国についても今まで持っていたイメージとは異なるものを発見することができた。

まず日本の当たり前だと思っていたことについて考え直した点は教育についてだ。カンボジアで、王立プノンペン大学や秋ら一さんのやっている貧困学校、農村の中学校を見たことで教育のばらつきがあることを知った。農村でチアノルさんから話を聞いた際に小学校でも高学年になると中退する人の割合が多くなるという情報や、学校に女子が多いのは男の子が労働力として働きに行ってしまうため女子が多くなっているという現状を聞いたときに日本の教育制度との差を感じた。チアノルさんが話の中でプノンペンの大学は別格だという話をしていたのがとても印象に残っている。日本ではどこの地域にいてもほとんど同じレベルの教育を受けることができるがカンボジアではそうではなく場所や人の環境で教育のレベルが全く違うことを知って驚いた。カンボジアにいる人々が同じ水準で教育を受けることができるために私たちが何を支援できるのか考えてみると、学校の支援や子供への支援も大切だけれども教師への支援をしなければいけないのではないかと思った。給料が低いから副業の農村に先生が集まらないのならば、先生が副業をしなくて済むような状況を作る支援を行うべきだと私は考えた。このツアーを通して実際に私ができることは少ないかもしれないけれど現地の教育の発展のためにももっと自分に何ができるのか考えていかなければいけないと感じた。

私はカンボジアについてこのツアーに参加する前は貧しい国というイメージしかもってなかった。しかしこのツアーの中でその印象はガラッと変わった。確かにイメージ通り貧困を感じる場面は多くあったけれどもそれ以上に発展していく街並みやその場に生きている人の活発な様子を見ると自分の持っていたイメージは偏見だったのではないかと考えるようになった。都市部で働く人を見るとやる気のある人は上に上がっていったり大学に行ったりして上をどんどん目指している人がいてこれからの発展していくカンボジアを人からも感じる事ができた。農村などの都市部ではない場所でも道や電気が通ったことで生活が変わったという話を聞いてから少しずつではあるけれど農村の状況も変わってきているということが分かった。しかし貧困を感じる場面も多くあった。特に衛生面や生活環境のことが多いと感じた。今残っている貧困を解決するために自分に何ができるのかツアーの中でたくさん考えさせられた。ただ支援するだけではなくこれから現地の人々が自らの手で運営していけるように支援をしなければいけないと感じた。またしゅりむアップやプノンペンだけではなくもっと炭積み農村まで支援の手が広がるようにしていかなければいけないと感じました。教育の支援の



ことと同じように生活の支援も大きいことじゃなくても自分にできることは何か考える必要があると感じた。

ツアーに参加したことでカンボジアの現状についてや SDG s についても一度考える機会になったのでこれからの生活や大学生活でこの経験を最大限生かしていこうと思う。

【カンボジアで気づいたこととカンボジアの問題】

西南学院大学 経済学部 1年生

私は今回のスタディツアーで一方的な面でしか物事を見ていなかったのだと気づかされた。カンボジアの子どもたちと触れ合うとき、子どもたちがどうしたら喜んでくれるかを考えて活動した。みんな本当に素直で純粋で言葉が通じなくても笑顔が輝いていた。これを見て私は勝手に満足して胸がいっぱいになっていた。しかし、振り返ってみると私たちが短期間だけ孤児院に訪問して接することは子どもたちにとって人格形成の大切な時期に「愛着と離別」を繰り返し体験することになる。

また、ポルポト時代にポルポト政権が行った大虐殺もなんてひどい時代だったのだろうかというだけで終えてしまいがちだが、最初から大虐殺をするつもりであったのだろうか。今まで自分本位の一方的な考え方でしか世の中を見ていなかったのではないか。Sui-Johの浅野さんがおっしゃっていた「色眼鏡を壊して物事を見る」という言葉が私にとってとても衝撃的だった。知らない間に私たちは色眼鏡をかけていてこの世の中の現実を勝手に決めつけてしまっていたのではないかと思った。

この8日間で私はカンボジアのために何ができるかいろんな場面でたくさん考えた。そこでSDGsの考え方は今のカンボジアにとって大きな課題になるのではないかと考える。SDGs(持続可能な開発)とは、2015年9月に国連でのサミットの中で世界のリーダーによって決められた17項目から成る国際社会共通の目標である。特に私が17項目ある中で注目した項目は12項目の「つくる責任・つかう責任」である。この項目をみて「リサイクル」という言葉が咄嗟に思いつく。日本でも世界基準のリサイクルに照らし合わせると実はたったの23%しかリサイクルできていない。そもそもカンボジアにリサイクルという考え方があるのだろうか。環境省の人に話を聞いたところカンボジアには分別の習慣はないようだ。ごみ収集が始まったのも2007年からである。ここで私がカンボジアのごみ問題解決に繋がる案をいくつか考えた。一つ目は町中にあるごみ箱を分別が促進されるような様式・デザインに変えることだ。リサイクルをするためには国民がまず分別する習慣を身に着けることが必要であると思う。

二つ目はつかう責任というところに年々増え続ける観光客に焦点を当ててみる。観光客がごみを出す場面はホテルが多いと思う。私が8日間ホテル住まいをしてアメニティの提供はいきすぎたおもてなしではないかと思った。歯ブラシやくしは一度開封するとまた次の日新しいものが備え付けてある。8日間毎日新しいものにする必要は感じないのでそこを工夫するとコスト削減にもつながり多くの観光客から出るごみも減るのではないかと思う。多面的な考え方を大切にしてカンボジアにとどまらず新興国のためにできる本当の支援について考えていきたいと思った。

【気づき】

神戸女学院大学 文学部 1年生

私は、2020 春1か国のツアーに参加して、引率者がおっしゃっていた「色眼鏡を外して物事を多角的に捉える」を意識して研修先を回った。色眼鏡を外すには、日本で養ってきた価値観・常識を捨てなければならない。困難ではあるが、訪問する先々で客観的・主観的に物事を俯瞰することで、様々な思考を得られたと思う。そう思えた理由が2つある。

1つ目は、このツアーのメンバーから得られた気づきである。研修先で様々な分野に携わっている方からお話を聞き、気づいたことやお話の中で知らなかったこと、重要であることをメモに書き留めた。その後、ホテルにてテーマに沿ってこのツアー最大の魅力のディスカッションをするのだが、テーマに沿って話を進めていくうちに大抵、話の筋が今日訪問した研修先や出来事の話になる。その時に自分がメモに書き留めたこと以外の考えや気づき、スルーしてしまっていたお話をディスカッションのメンバーから聞き、自分が持つ価値観・偏見がどれだけ狭いものかよく思い知らされた。私は運よく1日目の時点で、ディスカッションをしている間に気づけた事によって、その後の研修先では今までの偏見を捨て、現地の方のお話をインプットし易くなった。自分の身の回りに人がいなければ、ディスカッションする機会がなければ、得られなかった事だ。

2つ目は、私たちの住む日本とは大きく環境が異なることからである。カンボジアに来るまでも、日本との環境には大きな差があるものだと思っていたが、実際目の当たりにすると感じることは沢山あった。しかし、日本とこれほどまでの差がなければ、色眼鏡を外してまでもカンボジアを視感しなくてよい。この差がカンボジアで様々な思考を得られた起りである。帰国してから、日常を過ごす中で、カンボジアでの現地の方々の暮らしを思い出すことがよくある。ゴミをゴミ捨て場に運ぶときには、ゴミ山の風景、そこで働いて生活を営む人々。いつも通り道路の端を歩いているときには、カンボジアでの幾度となく続くバイクの往来、ほぼ無意味だと思われる安全でない歩道。幼稚園や、義務教育が施される学校、大学を見かけたときには、孤児院での子供たちの笑顔、外での昼食。特に何も無い時にでも思い出されるトゥールスレン収容所とキリングフィールド。約40年前起こった内紛がある事によって、今現在のカンボジアが在る。自分自身の目でカンボジアの現状を見た限り、日本で暮らす人々よりも何故か、幸せそうに見えた。すでに起こってしまった歴史は変えられないが、これからは変えられる。私にはカンボジアで暮らす人々が幸せそうに見えても、歴史によって未だ苦しみ、自由を得られていない人が一部いると知った時は衝撃だった。日本では思想は自由だ。私は第一に昔に囚われず自由に生きてほしいと思った。その為には私は日本でどのような行動をとるべきか。まだ結論に至ってはいない。これからの大学生活3年間で模索しようと思う。このツアーはとても有意義であった。